
機動戦士ガンダムSEED ～時空を越えた魔導師の後輩紀～

ヨシヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED 〈時空を越えた魔導師の後輩紀〉

【Nコード】

N8093J

【作者名】

ヨシヒロ

【あらすじ】

.....何作って居るんでしょう...。
ひとまず、時空を越えた魔導師のスピノフ、ではなく外伝みたいな物です。こっちは本当に不定期更新になります。

第一話？

コズミック・イラ70。地球・プラント間の関係は悪化の一途を辿っていた。

ファーストコーディネイターである‘ジョージ・グレン’の告白から半世紀以上。遺伝子調整を受けた新人類‘コーディネイター’と、遺伝子操作を受けていない旧人類‘ナチュラル’との溝は深くなる一方であった。地球上でもコロニー内でも反コーディネイター派の‘ブルーコスモス’によるテロが起きるなど、時代は混沌とした闇に包まれていた。

そして、コズミック・イラ70 2月14日…。ついに取り返しのできない悲劇が起こってしまった。プラントが建設した農業用コロニーの一つ、‘ユニウスセブン’に核ミサイルが撃ち込まれ27万3721名という住民の殆どが死亡する最悪の出来事を切っ掛けに、地球とプラントは開戦。瞬く間に戦場は世界中に拡大した。

当初は圧倒的な物量を誇る地球軍の勝利……。そう思われた戦況は、プラントが組織した‘ザフト’が開発した新兵器、‘モビルスーツ’の登場により形勢は一気に逆転。地球軍は地球、宇宙を問わず殆どの戦場で敗走。が、プラントは物量不足が災いし、戦線を拡大できずに両者は膠着状態に入り十一ヶ月が過ぎようとしていた…。

そんな中、‘デブリベルト’のとある一帯に、三角錐型の蒼く輝いている宝石が浮いていた。その宝石は自ら発光して、辺りのデ

ブリを照らしている。

そして、何の因果かその一帯に隕石が近づき、近くを漂っていた戦艦に直撃。まだ弾薬が残っていたのか戦艦は大爆発を起こし、蒼く輝く宝石その輝きを増しながら、勢い良くデブリベルトを飛び出した。そして、宝石はあり得ない速度で一つのコロニーに向かって宇宙を駆け抜ける……。

「C・E・71 1月25日 資源衛星、ヘリオポリス、」

ヘリオポリスの中には、ザフト軍のモビルスーツ、ジンが二機侵入していた。どちらも、地球軍の大型トレーラーの周りに展開している装甲車やリニアタンクを破壊している。

「おい、イザーク、ディアッカ、ニコル！まだ終わらないのか！？」

二機のジンの内、一番機のパイロットであるミゲル・アイマンは、新型モビルスーツの強奪実行部隊の赤服三人に激を飛ばした。いくら装甲の厚いモビルスーツでも、小型とはいえ何回もミサイルや対MS用のバズーカを受けていては破壊されてしまう。作戦が始まって約十五分。初めは混乱していた地球軍も今では統率を取り戻し、組織的な反撃を始めていて、そろそろ離脱しないと母艦に帰投できなくなるかもしれない。と、五台目の装甲車を破壊し終わると、実効部隊の三人から通信が入った。

『すみません、ミゲル！今終わりました！』

『わりい、わりい。ナチュラルの奴らスンゲーちゃんなOS積

みやがって、書き換えなきゃ動かなかったんだよ」

「貴様ら、任務中だぞ！通信で私語を挟むな！！それよりオレ達はこの機体をクルーゼ隊長に無傷で運ばなきゃなんのだ。グズグズせずにさっさと離脱するぞ！」

上から順にニコル・アマルフィ、ディアツカ・エルスマン、イザーク・ジュールと言い、ザフト軍の軍学校を優秀な成績で卒業した証、赤服を着ているエリートだ。

エリートとは言え、実戦はそこまで経験していないヒヨッコ。まだまだ危なっかしい所があるが、経験を積みればこの三人、間違いなく優秀な軍人になるだろう。

「よしお前ら！後ろはしっかり守ってやるからさっさと離脱しろ！」

「待つてください！まだ奥の軍事施設にある残りの新型をアスラン達が…」

「…わかった。ケイン！お前はコイツらの護衛をしろ。俺はアスラン達の援護に向かう！」

「わかつ……」

ビー！　ビー！　ビー！

「『！？』」

「聞こえ…か。ミゲル…」

「隊長！？どうしたのですか！？」

「今、ヴェサリスからリオポリスに…かつて謎…高エネルギーギーが向かっている。正…はわか……が注……ろ！」

この通信は新型に乗っている三人にも聞こえていたようで、三人それぞれ意見を出し合っている。全く、遠足じゃないんだぞ！？

だが、今はそれどころではない。

「おい、ケイン。お前は早くコイツらをヴェサリウスに連れてけ！ んでもってさっさと戻ってこい！ 俺も急ぐが何かヤバそうだし…」
『…わかった。気を付けろよ！』

そう言いつつ、ケインは新型三機の護衛をしながらヘリオポリスを離脱した。ミゲルも、ジン、をニコルが言っていた施設に向けブースターを吹かした。

side ムウ

「ええい！ いい加減落ちろおお！！」

ムウは自身の愛機、メビウス・ゼロの、有線式オールレンジ攻撃兵装ガンバレルを巧みに操り、ジンを一機中破させ、撤退させたところだった。が、こちらの被害も酷く、僚機である二機のメビウスは撃墜され、母艦も落とされてしまった。

そんな中、敵がいなくなり一息ついていると、モニターの端に蒼い光がキラツと輝いた。

「何だ、今の光りは！？」

ムウは直ぐ様機体を光った方向に向け、機体のカメラを最大望遠にした。すると…

「…蒼い…彗星…？ バカな、そんな筈は…。それにこのままだと直ぐにヘリオポリスに突っ込むぞ……………っ！」

蒼い光を見ていたムウは突如機体のブースターを目一杯まで使い機体を加速させた。

直後、先程までメビウス・ゼロが居た辺りを多数の銃弾が通りすぎていった。

「くっ！お前は…！」

『久しぶりだな、ムウ・ラ・フラガ！』

「ラウ・ル・クルーゼか…！」

『貴様にも見えたか、あの光りが…』

「！？ お前はあの光りが何なのか知っているのか！？」

二人は戦闘をしながら通信をする。ムウはメビウス・ゼロのガンバレルを使い四方八方からクルーゼを狙う。

が、クルーゼは初めから攻撃が来るのを知っていたかのようにガンバレルを避け、ガンバレルの一基を‘シグー’の左腕に装備されている‘M7070 28？バルカンシステム内装防盾’で撃ち落とした。

『残念ながら、私でもそれはわからない。ただ、戦艦の主砲などとは比べ物になら無い程のエネルギー体だということだ。そんな物がコロニーにぶつかればどうなるか……………何！？ ヘリオポリスに入ったと！？ 何の衝撃も無しでか……………』

「馬鹿な、冗談も休み休み、言えっ…！」

『フツ、君との戦いもそろそろ飽きたな。今はあの光が気になるのでね。私はこれで失礼しよう！』

「待て、クルーゼ！ ……っ！くそっ…！」

クルーゼは牽制するように右手の‘MMI-M75 76? 重突撃機銃’を一齐射すると、素早く機体をヘリオポリスの港に侵入させた。

ムウもそれに少し遅れながら、メビウス・ゼロのバーニアを噴かし港に進入した。

side out

ヘリオポリス内

「ラストイ！」

アスランの目の前で、友であり機体強奪の実行部隊の一人、ラストイが撃たれた。アスランは一瞬ショックで固まるが、直ぐに怒りに感情を染め一気に新型の一機に近づき近くの敵を撃ち殺す。

だが、一人はギリギリで体をずらしたらしく肩を怪我するだけで終わってしまう。もう一度銃を撃とうとするが急な揺れにより銃が射てなくなっていた。アスランは銃を捨てナイフを取り出すと止めを刺すため一気に敵に肉薄する。

すると、敵兵を庇うように一人の少年が飛び出した。アスランは少年を見て固まる。何故なら…

「キラ……？」

「アス、ラン……？」

その少年は、アスランがまだ月面都市‘コペルニクス’に住んでいたとき親友になったキラ・ヤマトだったからだ。

ここに、二人の親友が戦場で出会うこととなり、それが新たな悲劇の始まりの合図になるとは、少年達は知るよしもなかった…。

アスランに気づいた敵：女はアスランに銃を向けると躊躇いもなく引金を引く。だがアスランはそれを避け、もう一機の新型のコックピットに滑り込んだ。

それを見た女：マリュー・ラミアスは舌打ちをすると守っていた機体、‘ストライク’にキラと呼ばれた少年をコックピットに押し込み、自身もコックピットに入った。

） side ミゲル ）

「あそこか！！」

ミゲルは機体のブースターを限界まで使用し、最速で残りの機体がある施設に到着した。

見た限りではモビルスーツの影はない。失敗か…？
そう思った途端、目の前の倉庫が爆発を起こした。

「くっ！？」

ミゲルは慌てて機体を後ろに下げる。すると、爆煙の中から一体の鉄灰色のモビルスーツが現れた。

一瞬敵かと警戒するが、すぐに通信が入る。アスランからだ。

『すまない、ミゲル！ 遅れた！』

「アスランか！ …ラステイはどうした！？」

『…ラステイは失敗だ！ もう一機には地球軍の士官が乗って…

…！！ な、なんだあの光は！？』

アスランがラステイと話している間に、いつの間にか謎の高エネルギー体……いや、蒼い光がこちらに向かって降ってきていた。

「なに！？ コロニーの外郭を抜けたのに振動すら無いのか！？」

『お、おいミゲル、あの光は何だ！？こちらに向かって……！』

次の瞬間。アスランの乗る‘イージス’とミゲルのジンの間に光が直撃し、辺りは閃光に包まれた……。

閃光は十秒程で収まり、辺りには変化という変化は見られなかった。

「……………」
『……………』

先程まで聞こえていた銃声も今は途絶え、寒々とした沈黙が辺りを漂っている。

ミゲルは呆然としながらも、カメラを先程の光が落ちたであろう辺りに向ける。と、そこにはさっきまではなかったモノが転がっていた。

「…な、んだ…？」
『人……………なのか…？』

アスランもミゲル同様、カメラで見ていたようで、偶然にもミゲルの言葉を繋げるように声を漏らした。

｝ s i d e ？ ？ ？ ｝

「…こ、こは？ 一体どこだ？ ……！そうだ、僕は晶先輩の調査中に次元心に巻き込まれて…そうだ、フェイ先輩達はどんなったんだ！？」

地面に倒れていた人影は意識を取り戻したようで、暫く回りを見回して慌て始める。

「これ…コンクリート…？ ってことはここ、‘アームド’じゃない…？ どうなっているんだ？ ……！ッ！！」

そしてその少年は視線を上に向けて固まった。何せ、そこには全長二十メートルを超える鉄の巨人が二体も目の前に立っていたからだ。

「な、ななななな！?!?」

あまりの出来事に一瞬で頭が爆発する。こんな事態想定外だぞ！
？ 僕は先輩探索の調査に来てて、そしたらアームドの近くにある管理外世界へといつてもミッドチルダからは相当離れているが……で見つかったロストログリア反応に調査は一端中止。で、反応の調査に来たら次元震に巻き込まれて目の前には巨大なロボット……。ハハ、もう訳わかんないよ……。

『お、おい！ その人間！！聞こえているか！?』

「……え？ 有人機…なの？ それともAI?」

『ミ、ミゲル！こっちの声が届いても向こうの声は聞こえないぞ！ それより早く離脱する方が先決だ！!』

『チッ！ わかった。…だがアスラン、お前は先に離脱しろ。』

俺は後一機を奪取するか破壊する』

『わかった…!』

すると、鉄灰色の機体は独特な電子音を響かせると装甲の色を深紅に染め、ブースターを使いその場から離脱した。

「うわっ!!」

その時の風圧で謎の少年は吹き飛ばされてしまった。

side out

イージスが離脱すると、暫くして爆煙を突き破りもう一機、鉄灰色のロボットが飛び出てきた。

着地をした途端、機体はバランスを崩し補助バーニアを数回噴かして何とか姿勢を安定させる。

「アレか！」

ミゲルは様子見に‘MMI-M8A3 76mm重突撃機銃’を構え数発撃つ。元々当てるつもりもなく弾はロボット――‘ストライク’――の足下に直撃し、機体を大きく揺らした。

「何だあのモビルスーツ…未完成なのか？」

そこで、先ほどのニコル達の会話が思い出される。

「そう言えばあいつら、OSが使い物にならないとか言っていたな…。なら、今がチャンスだ!!」

く ストライクコックピット内 く

く くつ!!」

ストライクのコックピットの中はジンの銃撃で凄まじい振動に見舞われていた。先程アスランの銃弾を肩に受けてしまったマリューには振動によって激痛が走る。

「ッ!!」

頭を振ってモニターを見ると、こちらに向かって重斬刀を構え走ってきているジンが映っていた。直ぐさま迎撃用に頭部に設置されている「75mm対空自動バルカン砲塔システム イーゲルシュテルン」を撃って弾幕を張る。が……

「くっ、照準が合っていない!？」

OSが不完全なせいで、イーゲルシュテルンはジンとは全く違う方向に向かってしまう。ジンはイーゲルシュテルンを警戒して少し回避したせいで斬撃を諦めシオルダータックルをストライクに叩き込む。それは見事に決まり、ストライクを後ろの建物にめり込ませる。

衝撃で目を瞑ってしまい、目を開けると目の前には右手で重斬刀を構え、ストライクのコックピット目掛けて突き刺そうとしているジンの姿だった。

（もうダメっ!!）

そう思い目を瞑る。だが……

ズドンッ!!

重斬刀が突き刺さる振動は一向に来ず、モニターを見ると右腕の

肘から先を吹き飛ばされたジンの姿が目に入った。あまりの予想外の事態に、シートの後ろに突き飛ばした少年が何やら叫び自分をシートからどかしても、マリューには抵抗する力もなく意識を手放した…。

side strike to ???

「間に合った……」

ジンの右腕は、先程イージスのブースターに吹っ飛ばされてしまった少年によるものだった。待機状態だった長銃型デバイス、‘デユナメイス’を起動させ、砲撃をジンの右肘にピンポイントで命中させたのだ。ジンにもストライクにも最小限のダメージで両者を引き離すことにも成功し、本人はかなり喜んでいる。因みに、デユナメイスはストレージデバイスであるが、シャーリー先輩とマリー先輩の改造で擬似AIを搭載した実験機で、インテリジェンスデバイスに比べれば機能は劣るものの、自動防御もしてくれる頼れる相棒だ。モードも三段階あり、近距離モードの‘ショーター’、中距離の‘ライフル’、そして長距離の‘スナイパー’だ。そして今はライフルモード。

「…それにしても、ここは管理外世界なのかな？ あんな質量兵器もあるみたいだし……って！ 何するのさ!？」

少し目を離していたらいつの間にか鉄灰色だったストライクは白赤青のトリコロールに装甲を染め、手に持っているナイフをジンの

肩口に突き刺していた。

「せ、折角止めたのに……」

すると、ストライク何かを感じ取ったのか、ジンから勢いよく飛び退き、そのままブースターを使って離れる。何だ何だと思っていたら、灰色が一瞬ピカツと光って……って！！

「自ば……………」

今度は防御魔法が間に合ったものの、また吹き飛ばされてしまう少年であった。

「……ううっ」

「あ、目が覚めた？」

少年が目を覚ますと、そこはテントのような物の中で寝かされて治療を受けているところのようだった。頭を触れば包帯も巻いてある。…助けてもらったみたいだ。

服を見れば普段着のジーパンと深緑を基調としたジャケットを模したバリアジャケットのままだ。デユナメイスも近距離モードで腰にある。壊れてはいないようだ。

「ってて…！ あ、あなたは？」

「私はミリアリア・ハウ。ここの学生よ。君、さっきの爆発で私たちのところまで飛ばされてきたのよ？生きてるのが不思議なくらい。運が良かったわね」

そう言つて頭を撫でてくる人は、人を呼ぶためかテントから出ていった。

ふと隣を見れば、オレンジ色のツナギを着て右肩に包帯を巻いた女性が寝ていた。肩の傷は銃で撃たれたのか、止血をしているも血が滲んでいる。しかも、傷のせいで熱も出ているようだ。

「……………やっぱり、ほっとけないよ。『力よ、彼の者の傷を癒せ……ヒール』」

手を女性の肩にかざし、魔力を込める。やがて手から緑色の魔力が溢れ、傷口に降りかかる。

少しずつ傷口は塞がっていくが、完全には治さず後は自然治癒に任せる。完全に治しては怪しまれてしまうからだ。それでも痛みは大分引いたらしく、寝息は穏やかになっていた。

「あー！君、まだ立つちゃダメー！怪我に響くでしょ！？」

「あ、ごめんなさい！それよりこの人、銃で撃たれたみたいですけど一体……………」

「うーん、私もよくわかんないけど、友達の話だと地球軍の人みたい。それより、君、名前まだ言っていないよね？教えてくれる？」

「あ、ごめんなさい。僕はマグナ…。マグナ・カッセルと言います。自己紹介が遅れてしまつてごめんなさい、ミリアリアさん」

「別に、気にしなくていいのよ。当然のことをしたただけだし…」

「ありがとうございます。すみませんが外に出たいのですが大丈夫ですか？」

マグナは、先程の自爆でどんな被害が出ているのか、気になつて仕方がなかった。あの時、止められなかったのは自分のせいだと考えてしまい、責任を感じていたからだ。

「…うん、特に目立つた外傷は無いし、私が付いていけば大丈夫か…。よし、じゃあ何処に行くの？」

「僕が吹き飛ばされてしまった所です。お願いします」

そして、ミリアリアの肩を借りて外へでる。するとそこには、さつき戦闘をしていたトリコロールのロボットが方膝をついた姿勢で鎮座していたのだ。

「こ、これ……さつきの！」

「うん。実はこれを操縦してたの、私の友達なのよ…」

「ええ！？」

「本人は巻き込まれて仕方無く戦ったみたいなんだけどね…。ま、そのお陰で私達は無傷なの。ほら、彼がそつ。キラ〜！

男の子、目を覚ましたわよ〜！！」

すると、ロボットのお腹の辺りが開き、中から一人の少年が降りてきた。

「ありがとう、ミリィ。君、大丈夫？もしかしてさつき僕がジンを撃破しちゃったから…」

「あ、や、いえ！違います！僕が早く避難しなかったからで…。キラさんのせいじゃないです。…それより、後ろの二人はいいの？勝手にカチャカチャ弄ってるような…」

キラ達は急いで後ろを向くと、機体のコックピットに二人の少年が入っていた。アレってやばいんじゃない？

キラさんも同じ考えを浮かべたようで、慌てて二人を降ろそうとする。

「二人とも、早く降り」「その二人！！その機体から降りなさい！早く！！」……間に合わなかった」

だけど、遅かった。テントの方を見ると、肩を押さえながらも拳銃をこちらに向けている女性の姿だった。

デユナメイスは危険事態と判断しプロテクションを張ろうとするが、ここは抑える。下手に刺激しない方がいいからだ。

「全員、こちらに一列に並んで一人ずつ名前を言いなさい」

女性……マリューは銃をこちらに向けながら指示を出し、逆らうわけにもいかず全員渋々と指示に従う。

僕を含め全員の名前を聞き終わると、マリューさんは、僕達が軍の重要機密を見て、触ったこと。それによってこのまま帰す訳にはいなくなり、処分が決まるまで暫くは行動を共にすることを言い渡された。みんな反論しようにも銃を撃たれて固まる。それからマリューさんの指示の下、キラさん達はトラックを運転したり物資の運び出しをやらされたけど、マリューさんが最後に「巻き込んでしまつてごめんなさい」と謝ったので、みんな不満はあれど行動してくれている。

僕は怪我人だからテントでマリューさんと待機。正直、怪我はもう回復魔法で治してしまったし、動く分には問題ない。動きたくても、マリューさんが気遣つてこつちを見ているから動けない……。

暫くすると、トレーラーを取りに行っていたサイ達が帰ってきた。マリューさんはそれを見るとストライクに近づいていき、キラさんに指示を出し始める。

一人になったことを確認して、腰のポーチに収まっていたデエナメイスを取り出す。細部をチェックしたけど……うん、壊れてない。カートリッジは装填済み込みで五十発ちよつと。…しばらくは大丈夫でも心許ないな…。

ズドオオオーン！！

「っ！！ まだ居たの！？」

「あれは、シグー！？ 指揮官機がこんなところまで…！」

頭上で爆発音がしてそつちを見れば、オレンジ色の戦闘機みたいなのが白いロボット――シグーと戦闘をしていた。と言っても、戦闘機には武器が残されていないのかひたすら逃げている。

すると今度は反対側の地面をビームが吹き飛ばし、白亜の巨艦が姿を現した。

「アークエンジェル！ 無事だったのね！！」

どうやらマリューさんの知っている艦らしく、大きく安堵する。シグーは戦闘機からアークエンジェルの方に狙いを変え攻撃を始めた。

マリューさんは慌てて、キラさんに「ストライクの装備を換装して！」と叫び、ミリアリアさん達もトレーラーの周りに集まっていたので、僕も急いでみんなに合流。

すると、こちらに気づいたのかシグーは戦艦からこちらに狙いを変え、戦闘機も引き離してこちらに一直線に向かって来た。ストライクの装備も換装し終わっていないのか、まだ鉄灰色のままだし、ピンチじゃん！

（っ！ デエナメイス、ラウンドシールド！！）

『Round Shield』

直ぐに腰にあるデエナメイスの演算を使い、手に取ることなく力トリッジをロード。ストライクを含め全域を覆えるほどの大きなプロテクションを張る。

マリュー達は驚いたようにプロテクションを見つめ、シグーは警戒したのか少し距離を取り銃を構えた。が、このプロテクションはただの時間稼ぎ。本命は別だ。距離を取ったせいでストライクの装備――ランチャーストライカーを換装し終え、装甲をトリコロールに染め上げる。敵もそれに気付き、プロテクションなんかお構いなしに右手に持ったライフルから銃弾を吐き出す。正確な射撃でストライクに迫るが、何とかプロテクションで持ちこたえることができた。プロテクションに当たった弾はそのまま重力に従い地面に落下。ズドンズドン、と落ちていく光景はちよつとおもしろい光景だった。

その間にストライクは巨大な銃を構え、シグーに向ける。それを見て、マリューさんは慌てて止めにかかった。

「ま、待つて！ それは……」

バシューーン！！

マリューの制止も間に合わず、銃口から赤と白のビームがシグーに向かって真つ直ぐ打ち出された。が、シグーはそれをギリギリで避け、右腕を失うも撃墜には至らなかった。だが、ビームはそれでは止まらず、地表に直撃し大穴を開けた。……って、穴！？ ここ宇宙だったのか！？

そしてシグーは、これはチャンスとばかりにその穴から宇宙空間に逃げ出し、戦闘は終了した。

戦闘が終わると、みんなはプロテクションを呆然と見つめている。魔法を使ってしまったのだから、仕方ない…のかな？

「…マ、マリューさん、これってストライクのなんですか……？」
「……いいえ、違うわ。こんなシステム私は知らない……。あったとしたらさっきのジンに使っているもの……。それより今の現象は一体……。シグーの重突撃機銃を、しかも運動エネルギーを相殺するなんて……」

（……不味い、慌ててプロテクションを張ったせいでこんなことになるなんて……。ああもう！何でこんな目立つ事を……！）

『マ、マリューさん、アークエンジェルっていう艦から通信が来てるんですけど……。それにこの緑色の光りは一体……』

「っ！… そうだった。今はそっちの方が先か……。キラ君、アークエンジェルにこちらに降りるよう連絡して！緑の光りは後回しにするわ！」

『わかりまし……。うわっ！？ き、消えた……？ 一体なんなんだよ……』

ストライクが動いた瞬間、プロテクションを破壊する。ふう、危なかった。消えたせいでマリューさんは余計混乱しちゃったけど、仕方ない。後でこっそり教えるしかないか……。

そんなことを考えている内に、アークエンジェルはストライクから少し離れた所に着陸し、特徴的な左右の足にあるハッチを片方だけ開けた。それを見たオレンジ色の戦闘機もアークエンジェルに向かっていき、足の中に入る。…あれって格納庫だったのか。

ともあれ、キラさんはストライク、僕達は物資満杯のトレーラーでアークエンジェルの中に入った。

アークエンジェルの格納庫はとても広く、奥には先に着艦したオレンジ色の戦闘機メビウス・ゼロといふらしいが一機に、謎の大型コンテナが嚴重に固定されていた。大きさからして、ストライクより大きそう……。

「ラミアス大尉、ご無事で!!」

そこに、格納庫の奥から数人の軍人が駆け寄ってきた。

「バジルール少尉!!」

「ご無事で何よりでありました」

「あなたたちこそ、よくアークエンジェルを……。お陰で助かったわ」

すると、ストライクを固定させてキラさんが降りてくる。バジルールと呼ばれた人を含め、後ろの人たちも驚いている。

「ラミアス大尉、これは一体……」

「へえ、コイツは驚いたな」

マリューさんが答えづらそうにしていると、メビウス・ゼロから紫色のパイロットスーツを着た金髪の男性がこちらに向かってきて

いた。……誰？

「地球軍第七軌道艦隊所属、ムウ・ラ・フラガ大尉だ。よろしく」

そして、マリューさん達と乗艦許可云々を話し出す。その間に僕たちはキラさんの元に……。だって空気が危ないんだもん。

「それより、君、コーディネイターだろ？」

金髪さん……ムウさんはキラくん近づくと、キラくんをコーディネイターと呼んだ。何それ？ そう思っただけを周りを見回したら、後ろに控えていた兵士達が銃を構えてこちらに向けていた！

「ちょ、ちよつと！ 何でみんなキラさんに銃を向けるんですか！？」

「そうよ！ キラは何もして無いじゃない！ 逆にみんなを助けてくれたのよ！？」

「……銃を降ろしなさい。彼は敵ではないわ。それにここは中立国。戦禍を逃れたくて、‘オーブ’に移住してきたコーディネイターがいてもおかしくないわ。そうでしょ、キラ君？」

「……ええ。僕は第一世代のコーディネイターですから……」

「第一……両親はナチュラルってことか……。いや、悪かったなとんだ騒ぎにしちまって。俺はただ、聞きたかったただけなんだがね。ここに来るまでの道中、コレのパイロットになる筈だったヤツのシミュレーションを結構見てきたが、やつら、ノロクサ動かすだけでも四苦八苦してたぜ。それに比べたら坊主の動きはどうだ。話にすらならない。だから気になっちまってね。」

……ヤバイ。話に全然ついてけない……。早く誰かに聞かないと、

フラガさんもどっかに行っちゃう……！……………？ 地球軍ってことは軍、だよな？ ならもしかして……。

「あ、あのー！」

今聞かないと後々大変になる。聞くなら今しかない！！

「？ どうしたんだ？ えーと……」

「あ、はい。僕はマグナ・カッセルと言います。それで、フラガ大尉にお聞きしたいことがあるのですが、大丈夫ですか？」

みんなの視線が痛い……。そりゃ十歳の子供が軍人に質問してるんだ。自分でも変なのはわかってるんだよ……。

「うーん、もしかしてオレのファンになったとか？」

「いえ、違います。確かにフラガ大尉はカッコいいですけど、それじゃなくて……」

「『時空管理局』という組織についてご存知ないですか？」

シーーーーン

あ、あれ？ やっぱしここ、管理外世界……？ 回りの目が更に痛くなったような……。

「……悪い。オレ、テレビとかあんまし観てないから知らないわ。……それより、ここは軍艦。いくら子供とは言え、少しは場所を考えなよ」

プチッ！ 何、今の？僕は頭がイタイ人ですか！？…ダメだダメだ。ここは抑えてもう一度…

「あ、ちよつとフラガ大尉、これは真面目な話で…」

「ああ、ハイハイ。そういうのは後ろにいる坊主達とな？…で、ラミアス大尉。外にいる部隊は‘クルーゼ’隊だ。早く物資の搬入を済まさないと手遅れになる。ヤツは攻めるときは早いからな、グズグズしてられないぜ。あ、それともう一つ。さっきのシールド、ありやなんだ？ シュミレーターでもあんなのは…」

『Round Shield』

もう我慢できない…！ 確かに僕は子供です子供ですよ子供なんですよ！でも頭のイタイ人扱いはごめんです…！僕はデユナメイスをショーティーモードのままプロテクションを発動。自分の周りだけを包み込む。

マリューさん達は僕が銃を取り出した時点で警戒していたみたいだけど、プロテクションが出た途端固まった。

「なっ！？」

「これは……先程ストライクを守っていたシールド！？」

「これで、さっきの話、真面目に聞いてもらえますよね…？」

…後でキラさん達に聞いた話だと、僕はその時、後ろに黒い悪魔が見えたそう…。酷いなあ、管理局に悪魔は白い一人です。分なのに…。

「改めて、自己紹介させていただきます。僕は時空管理局武装隊Ⅰ級次元航行艦‘アームド’所属、マグナ・カッセル一等陸士です。僕はある任務中にこの世界に跳ばされました。…それでも一度確認させてください。あなた方は本当に時空管理局をご存知ないのですか？」

返ってくるのは沈黙だけ。これは知らない、よな…。

「…ごめんなさい、本当に知らないの…」

「そう、ですか…。……………すみません、失礼しました」

…管理局とは全く繋がりが無い、か。これからどうしよう…。

それからは我に返ったマリューさんが物資の搬入を指示し、僕は扱いはひとまず保留（軟禁、かな？）となり、今は短距離転移を使ってコンテナをアークエンジェルに運んでいる。みんな光ったと思ったら、目の前にコンテナが現れてかなり驚いていたみたい。通信機越しだけど…。

それから数時間。搬入も終わって、今はメビウス・ゼロの隣にある巨大コンテナの上で大の字になっている。うん、自分はフルバツクで良かったと今なら思える。

「オーイ、マグナの坊主！」

すると、下の方からマードック曹長が大声で僕を呼んでいた。

どうしたんだろう？

「どうかしましたか？」

「おいおい、そんなとくに居たのか…。それよりほら、差し入れだ！取りに來い！」

マードックの右手を見れば飲み物のパックが…。すかさず飛行魔法で側にいく。総魔力量はA Aだからまだまだ余裕はあるのだ。

「うおっ！ 空まで飛べるのか…。便利なもんだな」

「そんなこと無いですよ。ここまでになるのに二年はかかりましたし、魔力だって無限じゃないんです。使えば使うほど減っていつて、完全に無くなれば最悪死ぬですよ？」

「うっ…。確かに便利って訳じゃねえんだな…。ほらよ。お、そうだ！それよか、おめえさんのデバイスつつつのを見せてくれなにか！？ 技術屋としては気になってな！」

「あゝ、すみません。デバイスは無理です。一応これ管理局でも新しいタイプですし、例え見せてもプロテクトで見れませんよ？」

そう言つと、いつの間にかマードックの後ろに並んでいたツナギの人達が一斉に肩を落とす。ちよつと怖い…。

「それより、あのコンテナの中身つてなんなんですか？大きさからしてストライクより大きいですよ…」

「あああれか…。アイツはストライクを含むGシリーズのプロトタイプだ。今は乗り手もないから予備パーツ扱いだ」

…なるほど。やっぱりモビルスーツだったんだ。

「動くんですね？」

「ああ、バッテリーさえ積みめばいつでも……っておい、まさか坊主…乗る気か？」

「いえ、ただ使えるようにはしといた方がいいと思ひまして。デユナメイスも役に立ちま……」

『総員、第一種戦闘体勢！繰り返す、総員、第一種戦闘体勢！』

「おらお前ら、さつさとストライクの最終調整しろ！敵さんが来たぞ！？死にたくなかったら急ぎやがれ！！」

「装備は三番コンテナだ！！」

艦内アラートとマードックの怒声で、格納庫内は一気に慌ただしくなる。ストライクを見れば、キラさんが乗り込むところだった。…戦って、くれるんだ……。……………。

僕は格納庫を出て、ブリッジに向かう。僕ができることをするために…。

） side Z・A・F・T・ ）

「見えた。足付きだ。まだモビルスーツは出ていな…
…いや、あそこか！！」

ヘリオポリス内に外壁を破壊して侵入したモビルスーツの構成

はジン三機に、先程強奪したばかりのイージス。この四機が突入部隊だ。ジン三機の装備は全て拠点攻略用の重爆撃装備、通称D装備で、当のミゲルも現在ザフトのモビルスーツが装備している中、唯一のビーム兵器である‘M69バルルス改特火重粒子砲’を装備している。

「アスラン、無理矢理付いてきた根性、見せてもらっぞ!？」

「…わかった」

アスランはイージスの‘PS装甲’をオンにし、機体を深紅に染め上げる。それを見たミゲルは効率よく攻める為二つのチームに分けることにした。

「よし、オロールとケインは敵艦をやれ！ 俺たちは最後の一機をやろ!！」

『『『おう!』『』『』』』

そして二手に別れアークエンジェルに向かったオロール組は両手に装備された大型ミサイル、‘M66 キャニス短距離誘導弾’を各々二発ずつ発射した。アークエンジェルはそれを撃ち落とそうと、艦上に設置されたイーゲルシュテルンで弾幕を張る事で四発中二発を破壊し、残りはアークエンジェルから大きく外れ、コロニーの地表とシャフトに直撃した。

「ちっ！ 外したか…だが今度こそ…!」

そしてオロールは残りのミサイルと足に付いているミサイルポットの発射スイッチに手をかけ、押そうとした途端、機体の四肢が吹き飛んだ…。

「ふう、間に合った…」

アークエンジェルのブリッジの上に、パイロットスーツを着てスナイパーライフルを構えたマグナがいた。

「マリユーさん、ジンを一機無力化。ストライク発進しても大丈夫です」

「…あ、ありがとう！ キラ君、頼んだわよ！」

「わかりました。キラ・ヤマト、ガンダム行きます！」

すると右舷カタパルトデッキが開き、‘ソードストライカー’を装備したストライクが勢いよく発進し、イーゼスがいる方向に向かっていった。

「よし、それじゃあやりますか。デュナメイス、カートリ

ッジロード。アクセルシューター・改！」

『Road Cartridge』

バシユツ、という音と共にデュナメイスから空薬莖が一つ吐き出され、マグナのポケットに収まる。そしてライフルの銃口に緑色の魔方陣が展開され、光が強くなっていく…。

「…よし、今だ！」

そして引金を引くと、魔方阵から拳大の光が勢いよく撃ち出され、ジンの右肩間接部に入り込んだ。

そう、マグナはモビルスーツ内に魔力弾を忍び込ませ、内部で爆発させていたのだ。いくら装甲が厚くても中身は脆い。さっきのオロール機もこれで破壊されたのだ。

それからあと三発を左肩、両足に撃ち込み、何時でも爆発できるように準備する。

残ったケイン機は、僚機が謎の爆発で沈黙したことで焦ったのか、残った武装を全て撃ち込んできた。

「なっ！」

直ぐに魔力弾を爆発させ、ケイン機を行動不能に陥れると、今度はミサイルの迎撃を開始する。

デュナメイスをショーティーモードにし、もう一発カートリッジをロードする。外に溢れそうな魔力を押し込め、圧縮し続ける。そしてチャージも終わり、デュナメイスのサポートとアークエンジエルのイーゲルシュテルンシステムをリンクさせて……

「ファイヤ
発射！！」

全イーゲルシュテルンと二十を超える魔力弾がミサイルに襲いかかる。

イーゲルシュテルンが届かない距離にあるミサイルは魔力弾が近くにあるミサイルもイーゲルシュテルンで退路を塞ぎ魔力弾で止めを刺す。

そして、戦闘開始から僅か三分。たったの三分でザフトのモビルスーツ部隊の半数は行動不能になった。

マリュー達は目の前の光景を、ただ啞然として見ることしかできなかった。イーゲルシュテルンが操作不能になったときは焦ったが、さつきブリッジに入ったときにマグナが何かしていったのだろう。…だが、そんなことはどうでもいい。今は目の前の事に対処しなければいけない。

『マリューさん、動けなくしたジンですが、回収しに行ってもいいですか？』

「え？」

『中の人も拘束しますし、転移でアークエンジェルの格納庫に送りますから……ダメですか？』

正直、パイロットはどちらでもいいがジンは欲しい。一機は頭部しか原型を留めていないが、もう一機は関節だけが壊れている…。本部に持っていけば十分使えるはず…。

「わかりました、許可します。その代わり急いでね！」

『はい、ありがとうございます！ あ、それとイーゲルシュテルンのコントロール、お返しします。勝手に使ってすみませんでした』

その通信が終わってから二分。左舷格納庫に二機のジンと体を縄とバインドでぐるぐる巻きにされたパイロット二人が転移されてきた。予め連絡を受けていた警備の兵士三人に連れられて、二

人は独房に放り込まれた。　マグナは転移が終わるとそのまま気絶するように眠りへと落ちていった。最後に、ミゲルとアスランの機体に置き土産を残して……。

｝ side ストライク ｝

キラは出撃前にマグナに言われたことを思い返していた。

『キラさんキラさん』

『あれ？　マグナ君どうして通信を？』

『いまブリッジですから。　それよりキラさん、今から言うことを良く聞いてください。さっき格納庫で僕がシールドを出しましたよね？　あれですけど、一応一回だけでも機体に直撃しそうになったら発動します。マシンガンみたいに連続して衝撃が来ると直ぐに壊れるので、注意してください。　あと、ストライクに丸い光が付いてきますけど、途中で消えるますので、消えたら機体を敵に突っ込ませて下さい』

『ええ！？　そんなでたらめな事……』

『大丈夫です。消えたらそれは………』

「敵が固まるか、手足を破壊されている……か。　いくらあの

シールドを見ても、これは眉唾物だよ…。　　ッ！　　居た！」

ストライクのカメラを右に向けると、シャフトの影からこちらを狙っている‘一機の’ジンが居た。気づかれた事を悟ったのか、両手に構えたバルルス撃つてくる。

直ぐ様機体をブースターで動かし、回避する。　が、バルルスは後ろにあったコロニーの支柱である分厚いワイヤーを容易く融解させた。

「っ！　なんて威力なんだ……。このままじゃヘリオポリスが保たない……。！！」

キラは機体をジンに向け、左肩に装備されているビームブーメラン、‘マイダスメッサー’を投げる。ジンはスラスターを使ってシャフトから離れ空中に浮く。

「今だ！」

そして今度は左腕に装備されたロケットアンカー、‘パンツァーアイゼン’を打ち出す。

盾だと思っていたものが近づいてきたのに驚いたのか、ジンは呆気なくアンカーに掴まれ動けなくなる。……が。ストライクのアンカーが後ろから放たれたビームによって破壊されてしまった。近づこうとした所を撃たれたので、ギリギリ直撃は避けられたのだ。

「ッ！　後ろ！？　それにあの気体は……！」

ストライクを狙撃したのは、深紅の装甲を持つイージスだった。イージスはビームをもう一発放ち、それはジンを拘束していたアンカーを破壊した。が、ジンは先程のパンツァーアイゼンの衝撃

でバルルスを手放してしまい、今は重斬刀を構えている…。

そして二機はタイミングを測るようにストライクの周りを回り出す。だが、この行動がマグナによって仕掛けられた罠に自ら飛び込むことになるのは、二人とも気付く筈もなかった…。

そして、二機は同時にストライクに近づき接近戦を仕掛けた。

キラは背中に装備されている巨大な剣…対艦刀‘シュベルトゲベル’を構え、ジンを無視する形でイージスに突っ込む。こちらにはPS装甲があるので、実体剣しか装備していないジンはそれほど警戒しなくてもいいと判断したからだ。そして、イージスはライフルを腰に置き右手からビームサーベルを出力し、ストライクのシュベルトゲベルと切り結ぶ。すると、接触回線でイージスがこちらに通信を送ってきた。

『キラ…！ キラ・ヤマト…！』

「アスラン…！ アスラン・ザラ…！」

それは、月のコペルニクスで別れた親友、アスラン・ザラからのものだった。

『どうしてお前がそんなモノに……地球軍いる！？』

「君こそ、何でザフトなんかにいるんだ…！」

『…地球軍がこんなモノを造って戦場を混乱させようとするからだ…』

「でも、ヘリオポリスは中立だ！」

『地球軍のモビルスーツを造っておいて何が中立だ！ キラ、お前は騙されているんだ。そんなものに乗って戦う必要はな…何をやってる、アスラン…！』ミゲル！？』

「ウワァー…！！！」

アスランとの通信に気を取られていたせいで、ジンの急接近に対応ができなかった。

重斬刀をもろに喰らい、ヘリオポリスの地表に叩きつけられビルに埋まる。あまりの衝撃に、意識が一瞬刈り取られる。

『今度こそ…もらったアー!!』

イージスの接触回線が生きているのか、ジンのパイロットが言っていることが聞こえてくる。

意識が回復して一番最初に目に飛び込んできたのは、いつの間にかバルルス回収してこちらに向けているジンの姿だった。

キラは自分の死を確信する。ゆっくりとバルルスの銃口に緑色のビームが溜まっていく…。そして発射まであと少し、という所で、マグナの置き土産が発動した。

『うがっ!』

ジンが構えていたバルルスが突然爆発したのだ。発射寸前だったせいでバルルスは盛大に爆発し、ジンの右腕全と左腕の肘から先を失った。機体にも相当なダメージが行ったのか、爆発の衝撃でシャフトに激突してからは全く動こうとしない。

『ミゲル!! キラッ、よくもミゲルを!』

すると、アスランがイージスをモバイルアーマー形態にし、イージス最強の兵装、‘スキュラ’をストライクに向けて発射した。

まだビルに埋もれたままだったせいで回避すら出来ない。アスランはしまったと思った直後、スキュラはストライクに直撃し、大爆発を起こした…。

「あ、あああ………！！！」

俺は今、何をした…？

ストライクを…キラを殺したのか…？この手で…。

アスランは震える右手を左手で抑えようとするが、震えは全く収まらない。それどころか震えは増える一方だ。

視線を両手に向ければ納得した。両手とも震えているのだ。これでは抑えられる筈もない。

そして、改めてモニターに視線を向ければ先程までストライクが埋もれていたビルの残骸が映っている…。今はもう瓦礫しか残っていない。あの威力だ、いくらPS装甲を持っても木っ端微塵だろう。

「………そうだ、ミゲルを助けないと…」

アスランはまるで何かに取り憑かれたようにミゲルのジンに向かう。

そして、イージスが背を向けてすぐ、爆煙の中に黄色く光る二つの目が輝いた。

…僕はどうなったんだ…？死んでしまったのか？

キラはゆっくりときつく閉じていた目蓋を開ける。そこには、先程と全く変化がないコンソールと計器類。バッテリーは……まだ余裕がある。

モニターを見れば、黒一色。だが、うつすらとだけと緑色に光って……あつ！　コレ、マグナ君のシールド！？　すごい……あの威力を受け止めてビクともしないなんて…。

キラは暫く呆然としたあと、思い出したとばかりにコンソールからキーボードを出し、ストライクをチェックする。

「たいした損傷は無し。よし、行ける！」

キラは操縦桿を握り、スラスターを噴かして一気に空中に躍り出た…。

「おいミゲル！応答しろ！ミゲル！！」

アスランが必死に呼び掛けてもミゲルのジンは全く反応がない……と思った瞬間、コックピットハッチが強制排除され、ミゲルが飛び出してきた。

「ミゲル！無事だったのか！？」

『アスランか…。ストライクは！？』

「…破壊した」

『ふう、ならいい。それよりアスラン、この機体をシャフトから外せ！早く！！ 自爆装置が誤作動を起こしたんだよ！タイマ―は動かなかったが何時爆発してもおかしくない…。そうなければこんなシャフト一発で終了だ！』

ミゲルの言ったことに、アスランはショックで一瞬固まる。

(コロニーが…壊れる…？)

思い出されるのは血のバレンタイン…。破壊されグシャグシャに曲がったユニウスセブン…。殺してしまった親友…。アスランの中で何かが弾けた。

「やらせて…やらせてたまるか…！」

『ッ！ お、おいアスラン！！ 奴が…ストライクがこつ

ちに…！』

「何！？」

ミゲルの叫び声に慌てて後ろを見れば、あの瓦礫と爆煙の中から空中に飛び出してきたストライクの…キラの姿だった。よく見るとストライクはうつすらと緑色に輝く膜に覆われている。あれは、クルーゼ隊長の言っていたシールド？

『くそつ、こんな時… 『アスラン！今の話は本当！？』 ……は？』

…何でまだ接触回線が生きてるんだ！？（マグナの置き土産その二）、キラは先程の通信を聞いていたようで、シュベルトゲベ―

ルをしまいこちらに近づいてきた。敵意はない…という事か。

『おいアスラン！ ヤツは一体誰だ！？ 何でお前の名前を知ってる！？』

『あ、初めまして。僕はキラ・ヤマト。アスランとは月のコペルニクスに居たときからの友達で…』

『んなこと聞いてねえー！！』

「……………」

もうグダグダだ…。

『だがアスラン、どうする？このジン、厄介なことにスラスターが片方シャフトに狭まっちゃった。しかも自爆するのは装置が作動してから十秒だ。下手に動かせばどうなるか…』

ミゲルの一言を聞き、改めてジンを見る。確かに、スラスターの片方がシャフトにめり込んでいる。これでは切断するしかないが、スラスターには大量の推進剤が入っているから破壊するのはダメ。かといって無理矢理引き剥がすのも自爆を早めることになり兼ねない。

ダメ元でキラの方を見る。キラも同じ答えに辿り着いたのか、ストライクの首を横に振る。万事休す…か。

『おい、…トライク！ 何…している！！ 応答しろ！！』

『は、はい！！』

『貴様、なぜ敵と通信をしている！？』

どうやらキラは指揮官に見つかり、事態を説明しているらしい。

だが、事態はそんなことを待つてくれる程甘くはなかった…。

アスランがジンに視線を戻すと、いつの間にかカメラアイは光を失い所々から吹き出していた火花もほとんど収まっていた。

収まっているのに、何故か、気になった。この状態のジンを、何処かで…。

ミゲルはアスラン、もといイージスの頭部がジンに向いているのに気づき、自然とそちらに視線が向いた。

『ッ！！　　な、何てこった！　　あれは……』

直ぐにヘルメットに付いている通信機を弄り、イージスに固定していた周波数を変え、ザフト軍共通の物に切り替えた。

『逃げるアスラン！　　ジンは確実に吹っ飛ぶ！！　　あれは…あの状態はアカデミーでも見ただろ！？　　トラップが作動してんだよ！』

トラップとは、機体が故障、もしくは破損して帰還が不可能な状態になったモビルスーツに行う鹵獲防止の作業だ。ある特定の順番で機体を起動させないと強制自爆させるもので、当然ザフト軍、地球軍の両軍とも、全ての武器に施されている。一度作動させたら最後、OSを完全に破壊するか、本人にしか解除は難しい代物だ。

『あの衝撃で作動したんなら、俺達に解除は無理だ！　　今機体を動かしたりしたら、即シャフトごと吹っ飛ぶぞ！！』

ある意味、睨み合っていて正解だったようだ。あの時、キラと協力してジンを動かしていたら、今頃ヘリオポリスは崩壊していただろう。

「……だからといって、このまま放って置くわけにもいかない！」

『方法があるのか！？だったら今すぐやれよ！！』

ミゲルの言葉に、唇を噛んで逃げることしかできない。…これで終わりなのか…？

「では、方法があるのでやってしまいます！！」

「『は？。』」

諦め掛けていたその時、俺とミゲルの間に一人の少年が降り立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8093j/>

機動戦士ガンダムSEED ～時空を越えた魔導師の後輩紀～

2010年10月11日05時24分発行